会津若松におけるライト・スケープデザイン

大町通り光環境の提案

a2200610　柄澤鮎子

[卒業研究背景・目的]

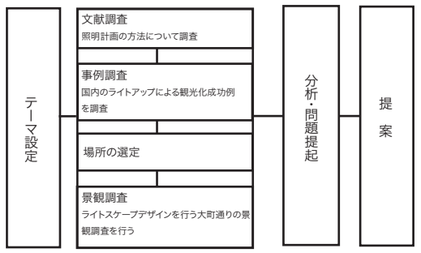
■会津若松の夜道 –歩行者の安全性–

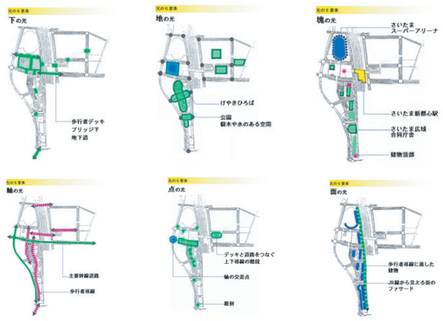
　我々の偉大な発明の一つに、火がある。古来、暖を取るためであったり動物から身を守るためであったり、生きるための基礎の部分には火はあったと考えられている。それが調理のためや神事のためなど、社会性を伴うに従って火の用途にも意義が生まれた。火は、我々の基本的な営みを支えていたと同時にその営みの中で生まれた喜怒哀楽とともに、その姿と存在は形を変えてきたのである。
その具現化したものとして、照明器具がある。照明器具の一つで人間の心理は変化し、人々に色々な心情を与えるのである。このことをライトスケープ＝光の景観という。

　そして、照明器具の前提には[光]という大きな枠がある。この光をどのように扱うかが問題になってくる。これらのことを会津若松市にあてはめてみた時、街灯の数が極端に少なく危険な場所や、街灯の数は充分でもその風景は私たちになんの感情もあたえず、記憶に残らない場合もある。

　そこで私は「会津の光環境」を取り上げ、人々が安全に歩行でき、訪れる観光客やそこに住む住民が親しめるような光環境の提案を行うことにした。

[研究方法と位置づけ]





[文献調査]

　ライトスケープを行っていく場合に、国内事例においてどのようなフローで行っているのかを調べた。

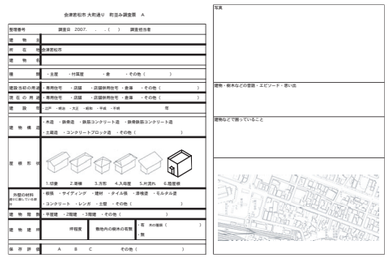
　埼玉新都心の6つの光の定義をはじめ、「倉敷市美観地区夜間景観照明計画」、「六本木ヒルズ光の原則」を参考としてきた。埼玉新都心の6つの光の定義は、目に入る光を「塊、面、軸、天、地、下」に分類し、位置づけた。これらのことから、光の意味、なぜこの照明が適切であるのか、など考え、提案の参考としてきた。

[景観調査]

　場所の選定を行うにあたっては、大町通りの町づくり団体であるアネッサクラブから、照明計画を行って欲しいという依頼が、研究室に寄せられた。

　私の取り上げていた光環境とテーマがあっていたことから、大町通りで照明計画を行うことにした。

　大町通りがどのような街で、どのような建物があるのか把握していないことから、まずは、景観調査を行うことにした。



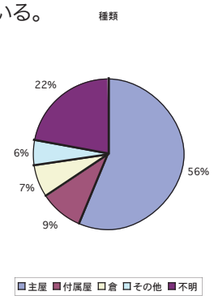
景観調査票を作って、町の人に答えてもらった。
建物形状、周辺環境だけでなく、昔の思い出話や、大町通りの様子、昔話を記入してもらった。

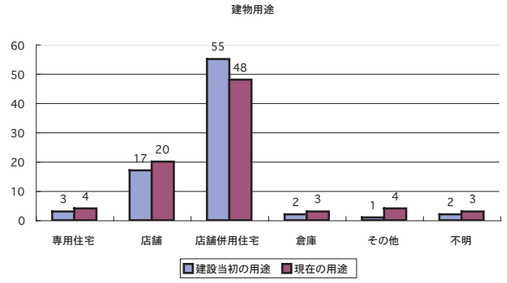
大町通りで残されている江戸時代に建てられた家

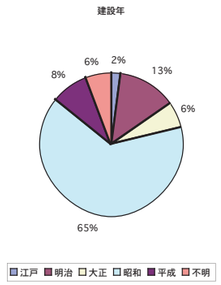
景観調査票から作った絵本
景観調査終了後にアネッサクラブに配布した。

[分析・問題提起]

景観調査を行ったところ、大町通りには、まだ蔵が数多く残っていることがわかった。また、江戸時代に建てられた建物も現存していることがわかった。
蔵は富の象徴といわれ大町通りには一軒のお宅に3つ蔵があるなど、昔は栄えていたことがわかった。しかし、現状では空き店舗、貸店舗など、昔の面影がなくなってしまい、かつての賑わいを知る人も少なくなってきている。







[提案]

昔の大町通りの様子を知る人が高齢化し、活気あった大町通りを知る人が少なくなっている現状から、景観調査票の記述から新たにわかった話を昔話として照明と結びつけることにした。提案では以下のようなスタディーを行った。

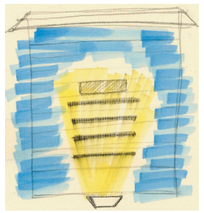
1.シャッターを使った昔話の投影
　夜になるとシャッターが降り、店の灯りがなくなる。そのシャッターを使い、
　スポットライトの光源に昔話を印刷したシートを貼り、シャッターに昔話を写す。

2.灯籠による照明
　アクリル板表面に昔話を印刷した灯籠を各店の前に配置し、点灯する

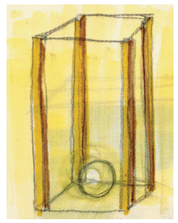
3.昔話のライトアップ
　店のショーウィンドウ内に昔話を印刷したアクリル板を下げ、
　それを店の内部からスポット照明をあてライトアップする。

また、昔話は記録として、気軽に読んでもらえるように絵本の作成も行う。

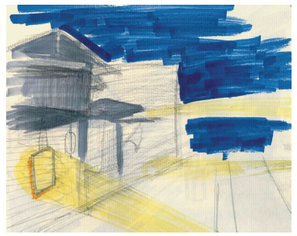
イメージスケッチ



提案1



提案2



提案3